

第2回 研究方法

マックス・ウェーバーの「研究の方法論」構築

目次

0 マックス・ウェーバーの略歴と業績	1
1 「方法論 Methodology」とは何か	2
2 『社会科学と社会政策の認識の「客観性」』（1904）	2
2.1 研究の前提：「主観性」と「客観性」	2
2.2 研究の対象	3
○実例：『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1904-5）	3
2.3 研究の方法：「理念型」——「研究方法」を明確化したもの	9
3 『社会学の基礎（根本）概念』（1921）	9
4 『支配の社会学』（1921-22）	10

0 マックス・ウェーバーの略歴と業績

- 1864年 4月21日、エアフルトで生まれる。
父は政治家、母は上流階級出身の敬虔なプロテスタント。
- 1882年 ハイデルベルク、ベルリン大学等で法律学、経済史などを学ぶ。
- 1889年 「中世商事会社史」で博士の学位を取得。
- 1892年 ベルリン大学の私講師となり、ローマ法と商法を講義。
- 1893年 マリアンネと結婚。
- 1894年 30歳の若さでフライブルク大学の経済学正教授として招聘される。
- 1895年 フライブルク大学での教授就任。講演「国民国家と経済政策」
- 1896年 ハイデルベルク大学に招聘される。
- 1898年 実父との確執から神経を病み、大学を休職しサナトリウムで静養。
- 1903年 病気のためハイデルベルク大学の教職を辞して名誉教授となる。
- 1904年 病気から癒え、新たな学問活動を再開。『社会科学・社会政策雑誌』を編集。
『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』
『プロテスタントイズムの倫理と資本主義の精神』
- 1905年 第一次ロシア革命に際し、ロシア語を習得。
- 1906年 ロシア革命に関する諸論文を執筆・公表。
- 1910年 『経済と社会』に含まれる諸論文の執筆開始。
- 1911年 『世界宗教の経済倫理』の執筆開始。
- 1916年 『儒教と道教』『ヒンドゥー教と仏教』
- 1917年 『古代ユダヤ教』
「職業としての学問」(ミュンヘンでの講演)
- 1919年 ミュンヘン大学で「職業としての政治」を講演。
- 1920年 6月14日、ミュンヘンで、スペインかぜによる肺炎のため死去、56歳。

◎ウェーバーの課題 = 社会「科学」を成立させること

「法則科学」である自然科学に対して、「現実科学」としての「社会科学」を立てる。

(社会科学の)研究者は、自身の価値観を自覚しつつ、学問的認識と価値判断を区別しなければならない(=価値自由 Wertfreiheit)。

1 「方法論 Methodology」とは何か

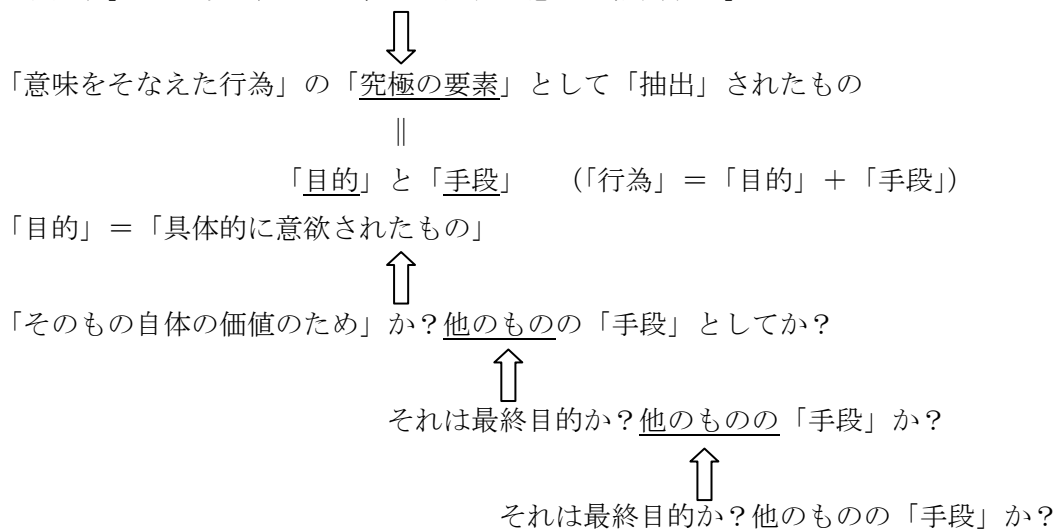
- ◎ 「方法論」: 研究領域が固有性をもち、したがってその領域を扱う学問が個別の科学として成立することを保証する基礎概念群。
研究の「準拠枠 Frame of Reference」。
具体的な研究方法 (社会調査、統計処理 etc.) ではない。
- ◎ 「方法論」の例: 経済学——「資本」「市場」「労働」「分業」 etc.
("Tourism Studies"の「方法論」は何か? 「準拠 (= 憧憬)」「移動」「待遇」…)

2 『社会科学と社会政策の認識の「客観性」』(1904)

- ① 研究の前提: 「社会的行為の主観的意味」と「客観的価値理念」
- ② 研究の対象: 「理念への関係づけにもとづく文化意義」
- ③ 研究方法: 「経済・理念・歴史」⇔ 「理念型」

2.1 研究の前提: 「主観性」と「客観性」

- ◎ 「社会的行為」: ウェーバーは、社会の中心に「人間の行為」を見た。
「行為」は「主観的意味」を担う。
- ◎ 「研究者」: 「思考を凝らして、その究極の意味を抽出する」



- ◎ 「主観性」と「客観性」の関連性
「究極において意欲されたもの」(主観性)

↓

個々人の「主観的な」価値を超えた、社会における「究極の価値」(客観性)

2.2 研究の対象

◎ 現実科学：「生活の現実を、その特性において理解する¹⁾」

「われわれが推し進めようとする社会科学は、ひとつの現実科学である。われわれは、われわれが編入され、われわれを取り囲んでいる生活の現実を、その特性において——すなわち、一方では、そうした現実をなす個々の現実の連関と文化意義とを、その今日の形態において、他方では、そうした現実が、歴史的にかくなって他とはならなかった根拠に遡って——理解したいと思う。²⁾」

経験科学 (VS 普遍科学 =哲学)	法則科学	一般的な規則性・法則性の発見を目指す=自然科学
	現実科学	個別現象の連関と文化意義とを、歴史的根拠に遡って明らかにする=社会科学

○理解の対象：「個々の現実の連関と文化意義」と、その「歴史」的根拠

- ・「現実の連関」＝「経済」という「特定の『一面的』観点」からみた連関
- ・「文化意義」＝「具体的な目的の根底にある理念」
- ・「歴史的根拠」＝現実の連関の元をなす過去の連関を考察する

∥

「経済」という「特定の一面的観点」から見れば「普遍的」である我々の社会生活を、にもかかわらず「個性的」であるとして捉え、しかも、同じように「個性的性質をそなえた過去の社会生活から生成してきた」と見る。

↑

自然科学では研究の到達点である**法則的理解**が、**社会科学では認識の出発点**である！

◎ 「实在の認識」 4 段階説

- ① 第 1 段階：实在の諸要因の「経済」的（＝法則的）考察
- ② 第 2 段階：諸要因の集合と協働作用に現れる「理念」の考察
- ③ 第 3 段階：集合の「現在にとって意義のある個々の個性的特徴」の「歴史」的考察
- ④ 第 4 段階：「未来における可能な布置連関を見定める」

○**実例**：『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1904-5）

- ① 資本主義の精神（現在にとって意義のある個々の個性的特徴）を、
- ② プロテスタンティズムの精神（個性的な先行の布置連関）から、
- ③ 歴史的に説明する。
- ④ 未来を予測する。

¹ Weber, Max (富永祐治他訳)『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫、1998、p. 73。

² 同上。

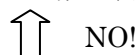
・ 問題提起

資本主義とプロテスタンティズムには関連性があるようだ:「さまざまな種類の信仰が混在している地方の職業統計に目をとおすと、通常つぎのような現象が見出される。それは…近代的企業における資本家や起業家についてみても、あるいはまた上層の熟練労働者層、とくに技術的あるいは商人的訓練のもとに教育された従業者たちについてみても、彼らがいちじるしくプロテスタント的色彩を帯びているという現象だ。3」



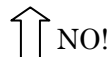
なぜ?その理由は、

- 1) 経済が発展するとプロテスタントに改宗するから?:「16 世紀のドイツでもプロテスタンティズムに帰依したのは、まさしく多数のきわめて富裕な、自然や交通事情に恵まれた、経済的に発達した地方、とりわけ無数の富裕な都市だった。4」



しかし、実際は、逆に宗教の方が人々の生活を支配している:「たしかに経済上の伝統主義から脱却したということが、宗教上の伝統にも懐疑をいだかせ、伝統的権威に対する反抗を力づける原因となったというふうに考えることもできよう。しかしこの点については、今日忘れがちな一つの事実に留意しなければならない。それはほかでもなく、宗教改革が人間生活に対する教会の支配を排除したのではなくて、むしろ従来のとは別の形態による支配にかえたただけだ、ということだ。しかも従来の形態による宗教の支配がきわめて楽な、当時の実際生活ではほとんど気付かれなほどの、多くの場合にはほとんど形式に過ぎないものだったのに反して、新しくもたらされたものは、およそ考え得るかぎり家庭生活と公的生活の全体にわたっておそろしくきびしく、また厄介な規律を要求するものだったのだ。5」

- 2) 少数派は営利生活に向かうから?:「民族的あるいは宗教上の少数者は、『被支配者』として他の『支配者』集団と対立しているような地位にある場合には、自発的にせよ強制的にせよ政治上有力な地位から閉め出されていく結果として、とりわけいちじるしく営利生活の方向に向かうことになるのがつねで、彼らのうち才能ゆたかな者たちは、政治的活動の舞台上で発揮することのできない名誉欲をこの方面で満たそうとする…6」



しかし、実際は、ドイツのカトリック教徒は少数派の場合でもその傾向を示さない:

「プロテスタント(なかでも後に論究する^{セクト}信団のあるもの)は支配的社会層であるときにも被支配的社会層であるときにも、また多数者の地位にあるときにも少数者の地

3 Weber, Max (大塚久雄訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、1991、p. 16。

4 同上、p. 17。

5 同上、pp. 17-18。

6 同上、pp. 23-24。

位にあるときにも、特有な経済的合理主義への愛着を示してきたが、カトリック信徒の場合は、前者の立場にあるときにも後者の立場にあるときにも、そうした経済合理主義への愛着を見ることができなかつたし、今日でも見ることができないのだ。⁷⁾

3) カトリシズムは「非現世的」でプロテスタンティズムは「現世的」だから？：

「ひとびとはこの対立（上述の対比：筑和注）を次のように定式化するのが適当だ、と考えたくなるかも知れない。すなわち、カトリシズムはより多く『非現世的』であって、その最高の理想が指し示しているように禁欲的な諸特徴をおびているために、信徒たちは現世の財貨に対してより多く無関心な態度をとるようになるのだ、と。…プロテスタンティズムを奉ずる人々はこの解釈を使ってカトリック的生活態度の（事実上のあるいは仮設上の）禁欲的理想を批判しようとするし、カトリック信徒の方はこれに答えて、「唯物主義」をプロテスタンティズムがもたらした生活内容全体の世俗化の結果だと非難する。⁸⁾

↑ NO!

しかし、実際は、プロテスタンティズムは、逆に非世俗的だった：「イギリス、オランダ、アメリカのピューリタンたちは周知のように、『世のたのしみ』とはおよそ正反対の特徴を帯びていた。…カトリシズムが『非現世的』だとか（それは仮設上のことに過ぎない）、プロテスタンティズムが唯物主義的な『現世のたのしみ』を含んでいるとか（それも仮設上のことに過ぎない）、その他この種のさまざまな漠然とした観念によっては、とうていこの問題を解くことはできない。⁹⁾

4) 「拝金主義」への反動から宗教に帰依したのか？：「キリスト教の信仰におけるもっとも内面的な形態の代表者が、商人層の中からきわめて数多く生まれたという顕著な事実がある。…このばあい、「拝金主義」に対する一種の反動が、商人という職業に適しない内面的な人々の心によび起こされたのだ、と考えることもできよう。¹⁰⁾

↑ NO!

しかし、実際は、「事業感覚」と「信仰」はプロテスタントでは「同時存在」していた：「練達な資本主義的事業感覚と、全生涯を貫き支配する、この上もなく強烈な形態の信仰とが、同一の個人ないし集団のうちに同時に存在する…¹¹⁾

↓ Therefore

ゆえに、資本主義的営利活動とプロテスタンティズムは結合しやすさをもっていたのではないか。「もしも、古プロテスタンティズムの精神における一定の特徴と近代の資本主義文化との間に内面的な親和関係を認めようとするならば、われわれはそれを、

⁷⁾ 同上、p. 24。

⁸⁾ 同上、pp. 26-27。

⁹⁾ 同上、pp. 27-29。

¹⁰⁾ 同上、pp. 29-30。

¹¹⁾ 同上、p. 30。

古プロテスタンティズムが（通常考えられているように）多少とも唯物的なあるいは反禁欲的な『現世のたのしみ』を含んでいたというようなことではなくて、むしろ古プロテスタンティズムのもっていた純粋に宗教的な諸特徴のうちに求めるよりほかはないのだ。¹²⁾

①「資本主義の精神」とは？（経済活動を行なう行為者の姿勢の考察）

ベンジャミン・フランクリンがその一代表：「問題の『精神』をものがたっている一史料をとり、説明の手がかりにしようと思う。この史料は、さしあたってそのような資本主義の『精神』を、ほとんど古典的と言いうるほどに純粋に包含しており、しかも同時に宗教的なものとの直接の関係をまったく失っているために——われわれの主題にとっては——『予断が入らない』という特徴をもっている。¹³⁾

フランクリンの精神は、**営利による資本の増大を、単なる金銭欲によるものではなく、自分の倫理的な義務とみなすものである**：「自分の資本を増加させることを自己目的と考えるのが各人の義務だ…¹⁴⁾



「そこには一つのエートス（Ethos [倫理的気風]）が表明されているのであって、このエートスこそがわれわれの関心をよび起こすのだ。¹⁵⁾



しかし、それは**倒錯した考え方**：「ところが、こうしたことは資本主義以前の人々には、不可解かつ不可思議であり、また不潔で軽蔑すべきものとしか思われなことがらだ。人間が生涯にわたる労働の目的として、莫大な貨幣と財貨を背負って墓に下ることをひたすら考えつづけるといったことは、彼らには倒錯した衝動…の産物と考えるほかに、説明の方法がないからだ。¹⁶⁾



この、営利活動を倫理的義務と見なす考え方は、いかにして生まれたのか？：

「資本主義文化のもっとも特徴的な構成要素となっている」Beruf（天職）「思想と——前にもみたとおりに純粋に幸福主義的な利己心の立場からすればはなはだ非合理的な——職業労働への献身とを生み出すに至った、あの「合理的」な思考と生活の具体的形態は、いった、どんな精神的系譜に連なるものだったのか…¹⁷⁾

¹²⁾ 同上、p. 33。

¹³⁾ 同上、p. 40。

¹⁴⁾ 同上、p. 43。

¹⁵⁾ 同上、pp. 43-44。

¹⁶⁾ 同上、p. 81。

¹⁷⁾ 同上、p. 94。

②プロテスタンティズムの精神 (背景をなす**価値理念**の考察)

1) ルターの「天職」概念

ルターは、修道僧に特有の「天職」の論理を世俗の仕事にも適用した。しかし世俗労働を「天職」とみなすだけでは、「資本主義の精神」がもつ、資本の増大をたえず求める、あの駆り立てられるような心のありかたは生まれない。絶え間ない資本の増大へひとびとを駆り立てた起動力はどこにあったのか。

2) カルヴィニズムの「予定説」

カルヴィニズムの「予定説」、すなわち、「人は救済と滅びのどちらかに予定されている」、という教えは、決定的な影響力をもった。そこで、自信のない一般信者は、救済に予定されていることの「証し」を求めた。ルターは世俗の労働も神から与えられた「天職」とみなしてよいとしたので、合理的な禁欲的主義で世俗の労働を行うことが可能になっていた。カルヴァン派の人々はこの合理的・禁欲的な世俗の労働で「神の栄光」を増大させることに「救いの証し」を見いだそうとした。

③歴史的説明 (**歴史的**考察)

1) 禁欲と資本主義精神

「神の栄光」は有益な職業労働から生まれると説かれた。そして職業の有益さは、その職業がもたらす「収益性」(どれだけ儲かるか)で測ることができると説明された。しかも享楽は徹底的に否定された。その結果、儲けても、金銭を享楽に使わず、営利活動に再投資してさらに利潤を追求していくことが宗教的に奨励された。結果として、資本主義が発展していった。(←「意図せぬ帰結」)

「プロテスタンティズムの世俗内的禁欲は、所有物の無頓着な享楽に全力をあげて反対し、消費を、とりわけ奢侈的な消費を圧殺した。その反面、この禁欲は心理的効果として財の獲得を伝統主義的倫理の障害から解き放った。利潤の追求を合法化したばかりでなく、それを…まさしく神の意志に添うものと考えて、そうした伝統主義の桎梏を破砕してしまったのだ。¹⁸⁾

2) 歴史的帰結

しかし、富が増大するにつれて宗教心は薄れていき、その結果、フランクリンに見られた、倫理的ではあるが宗教色の消えた「資本主義の精神」、つまり営利による資本の増大を自分の倫理的な義務とみなす精神が生まれた。

「宗教的生命にみちていたあの 17 世紀が功利的な次の時代に遺産として残したものは、何よりもまず、合法的な形式で行なわれるかぎりでの、貨幣利得に関するおそろしく正しい…良心にほかならなかった。…独自の市民的な職業のエートスが生まれるにいたったのだ。市民的企業家は形式的な正しさの制限をまもり、道徳生活に欠点も

¹⁸⁾ 同上、p. 342。

なく、財産の使用にあたって他人に迷惑をかけることさえしなければ、神の恩寵を十分にうけ、見ゆべき形で祝福をあたえられているという意識をもちながら、営利に従事することができたし、またそうすべきなのだった。¹⁹⁾

以上、「天職」という考えに立脚した資本主義を支える合理的な生活態度は、プロテスタンティズムの信徒がみずからの「救いの証し」を合理的な禁欲で追求したことから生まれた、ということが明らかになった:「近代資本主義の精神の、いやそれのみでなく、近代文化の本質的構成要素の一つというべき、天職理念を土台として合理的な生活態度は——この論稿はこのことを証明しようとしてきたのだが——キリスト教的禁欲の精神から生まれ出たのだった。²⁰⁾

④ 未来予測 (未来における可能な布置連関)

しかし、未来は明るくはない:「ピュウリタンは天職人たらんと欲した——われわれは天職人たらざるをえない。というのは、禁欲は修道士の小部屋から職業生活のただ中に移されて、世俗内の道徳を支配しはじめるとともに、こんどは、非有機的・機械的生産の技術的・経済的条件に結びつけられた近代的経済秩序の、あの強力な秩序界^{ユスキス}を作り上げるのに力を貸すことになったからだ。そして、この秩序界は現在、圧倒的な力をもって、その機構の中に入りこんでくる一切の諸個人——直接営利にたずさわる人々だけではなく——の生活スタイルを決定しているし、おそらく将来も、化石化した燃料の最後の一片が燃え尽きるまで決定しつづけるだろう。…禁欲が世俗を改造し、世俗の内部で成果をあげようと試みているうちに、世俗の外物はかつて歴史にその比を見ないほど強力になって、ついには逃れえない力を人間の上に振るうようになってしまったのだ。今日では、禁欲の精神は——最終的にか否か、誰が知ろう——この鉄の檻から抜け出してしまった。ともかく勝利をとげた資本主義は、機械の基礎の上に立って以来、この支柱をもう必要としない。…将来この鉄の檻の中に住むものは誰なのか…まだ誰にも分からない。…こうした文化発展の最後に現われる『末人たち』*letzte Menschen*」にとっては、次の言葉が真理となるのではなからうか『精神のない専門人、信条のない享樂人。この無^{ニヒ}のものは、人間性のかつてたつたことのない段階にまですでに登りつめた、とうぬぼれるだろう』と。²¹⁾

¹⁹⁾ 同上、p. 356。

²⁰⁾ 同上、p. 364。

²¹⁾ 同上、pp. 364-366。

- ◎ 「文化人 Kulturmensch) : 文化科学者
- 文化人 : 特定の社会現象を「意識的に」価値理念に関係づけることができる。



「いかなる手段が、ある考えられた目的を達成するのに適しているか、それとも適していないか、ある妥当性をもって確定することができる²²⁾」から。
多様な世界の「特定の現象」が、「文化人」によって「意味」を与えられ、それによって「科学」の対象となる。 ← その能力をもつ人間を科学者と呼ぶ。



ウェーバーが「カリスマ」について述べるときと同じ論理

2.3 研究の方法 : 「理念型」——「研究方法」を明確化したもの

- ◎ 「思考によって構成 (常に単純化) された事象の理想像」
- ◎ 経済 / 理念 / 歴史

「思考によって構成されるこの像は、歴史的な生活の特定の関係と事象とを結びつけ、考えられる連関の、それ自体として矛盾のない宇宙をつくりあげる。内容上、この構成像は、実在の特定の要素を、思考の上で高めてえられる、ひとつのユートピアの性格を帯びている。²³⁾

「歴史的な生活の特定の関係」 = 「経済」 ⇔ 経済法則による事象の把握

「実在の特定の要素」 = 「理念」

「思考の上で高める」 = 「価値理念」に関係づける

「ユートピア」 = 現実の模倣ではない、ことの強調

私たちは、「経験的実在そのもの」を認識することはできないし、「経験的実在の模写」もできない。それは実在が「無限の豊かさ」をもっているからである。私たちにできるのは、理念型を構成することである。このことによって「経験的実在」に意義が付与されるので、そして、この意義は主観的なものであると同時に客観的なものであるがゆえに、そこに妥当性が生まれる。

3 『社会学の基礎 (根本) 概念』 (1921)

- ◎ 諸概念
- 社会的行為 : 最も基本的な行為のカテゴリー

「社会学とは、社会的行為を解明しつつ理解し、これによってその経過とその結果とを因果的に説明しようとする 1 つの科学のことをいふべきである。…『社会的行為』とは、行為者または諸行為者によって思念された意味にしたがって他者の行動に関係させられ、かつその経過においてこれに方向づけられている行為のことをい

²²⁾ 『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』 p. 31。

²³⁾ 同上、pp. 111-112。

うべきである」

○社会的行為の諸動機

動機による行為の分類

①目的合理的：外的対象と他者の行動を期待することによって、そしてこうした期待を、合理的に、結果として求められ、かつ考慮された自己の目的のための「条件」または「手段」として利用する。

②価値合理的：ある固有の価値（倫理的、美的、宗教的など）をまったく純粋に、結果とは無関係に意識的に信ずる。

③感動的／情緒的

④伝統的

○正当的秩序

・種類：因習と法

・妥当根拠：伝統、信仰、制定律

○闘争

○共同社会関係（*Vergemeinschaftung*）と利益社会関係（*Vergesellschaftung*）

||

感動的／情緒的

||

価値合理的、目的合理的

○権力、支配

・権力：社会関係のなかで抵抗に逆らっても自己の意志を貫徹するおのおののチャンス

・支配：一定の内容をもつ命令に一定の人々が服従するチャンス

・規律：習熟した定位によって一定の多くの人々が迅速に、自動的に、かつ方法的に命令に服従するチャンス

4 『支配の社会学』（1921-22）

◎支配

支配者と被支配者とによって、権利根拠、つまり支配の「正当性」の根拠によって内面的に支えられる。この正当性の信念を動揺させるときは、重大な結果が生ずるのが常である。

①合法的支配

制定規則による合法的支配。最も純粋な型は官僚制支配。

制定された規則に対して服従が行われる。

命令者自身も、形式的に抽象的な規範に服従している。

②伝統的支配

昔から存在する秩序と支配権力との神聖性を信ずる信念に基づいている。

最も純粋な型は、家父長制的な支配。支配団体は共同社会関係であり、

命令者の型は「主人（*Herr*）」であり、服従者は「臣民」であり、行政幹部は

「しもべ (Diener)」である。

③カリスマ的支配

支配者の人 (Person) と、この人のもつ天与の資質 (カリスマ)、とりわけ呪術的能力・啓示や英雄性・精神や弁舌の力、とに対する情緒的帰依によって成立する。永遠にあらたなるもの・非日常的なもの・未曾有なものと、これらによって魅了されることが、個人的帰依の源泉。最も純粋な型は、予言者・軍事的英雄・偉大なデマゴグの支配。・・・彼のカリスマが証によって実証される間だけ、服従が捧げられる。